

小説

北森 鴻

下関市・宇部市・山口市 (1961～2010)

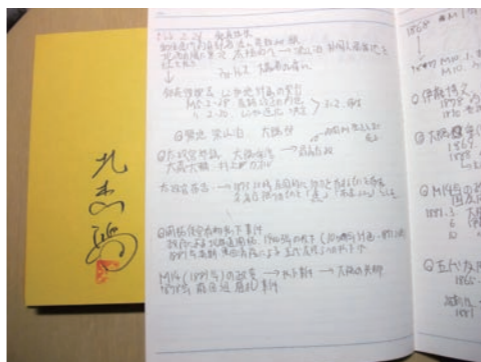


昭和三十六年（一九六一）に、山口県下関市小月町にて生まれる。本名新道研治。父親が中国電力の職員であったため転勤が多く、それに伴って幼少の頃より各地で生活をする。大学は東京に出て、アルバイトをしながらの学生生活を送ったが、居酒屋で働きながら調理師免許を取るほどとなる。後に作家となっても、友人達にその腕を振るうのみならず、紙面にも活用することとなった。大学卒業後は、編集プロダクションで働きながら小説を執筆し、平成五年（一九九三）に応募した作品が『鮎川哲也編・本格推理①』に掲載された後も創作を続け、長編小説を鮎川哲也賞に応募。平成七年（一九九五）に『狂乱廿四孝』にて第六回鮎川哲也賞を受賞し、小説家としての道を歩み始める。またこの年に、編集プロダクションを退社。フリーライターとして、さまざまなジャンルの記事を書きながら創作に励んだ。医療物の『冥府神（アヌビス）の産声』や、骨董商を主人公とした後にシリーズものとなる『狐兎』など、毎回緻密な取材と構成に基づく作品を発表していく。平成十一年（一九九九）には『花の下にて春死なむ』が、第五十二回日本推理作家協会賞、短編及び連作短編集賞を受賞する。次第に小説に専念し、民俗学をテーマとした蓮丈那智シリーズとなる『凶笑面 蓮丈那智ワールドファイルI』を発表。その後も精力的に創作を続け、小説雑誌への連載も増えていった。長編もさることながら、「短編創作の名手」と呼ばれ、ことに料理や酒、骨董などへの造詣の深さには定評があった。ひとひねりもふたひねりもする凝った作風を、短編にも惜しみなく披露し、入念な構成、考え抜かれたトリック、印象的なキャラクター造形が融合された作品を作り続けた作家であり、この先の作品が期待された作家でもあった。凝り性そのものの作品を作りながらも、デビュー作で示した時代物、ユーモア、ハードボイルドなどさまざまな作風を披露した作家の死には、今なお惜しむ声が多く上がっている。

（文・浅野里沙子）



遺品



自筆ノートとサイン

【著作】

- 『狐兎』（平成9年・講談社）
『花の下にて春死なむ』（平成10年・講談社）
『邪馬台 蓮丈那智ワールドファイルIV』（平成23年・新潮社）
ほか

神奈川県逗子市の某所、さる名家の別荘に、かつて大名屋敷の裏門であったと伝えられるものが、今も残っている。それは、周囲の菜の花の黄色に、ぼつんと浮かび上がった点のように、最初は見えた。近づくにつれて、点は大きな塊となり、輪郭の細部が明らかになってゆくと、大きいと表現するよりは「分厚い」といいたくなるような、黒塗りの門が周囲を威圧しつつそびえていることがわかる。作り付けの金具はすでに錆が浮いた段階を乗り越えて腐食へと進み、さらに目を凝らせば長年の風雪に耐えた木部、破り目地の海鼠壁にも大小の傷が無数についている。それでもなお微動だにせぬ風格を備えていて、なるほど、かつての大名屋敷の裏門であったという説明に、十分すぎるほどの説得力を持つ遺物である。

だがこの黒門には、それだけではない由来がある。いったんは構えたカメラのファインダーから目を外し、津島好一はつぶやいた。「これが…鹿鳴館の裏門…か」まさかそのようなものが、現在に至るまで残っているとは思ってもなかった。ましてここは三浦半島、逗子市郊外の別荘地だ。かつて明治の薫風を一身に受け、時代を代表するごとき、その建物が建っていたのは、現在の日比谷帝国ホテル近くである。そこから距離にして約六十キロ。黒門は流転のかぎりを尽くして、ようやくこの地に終の住みかを得たことになる。

「確かに流転…だな」ふと漏れた己のつぶやきの重みに津島は驚いた。このの始まりは編集者・矢崎春樹の一言だった。

北森 鴻 年譜

（提供・浅野里沙子）

Table with 2 columns: Year (昭和36, 昭和43, etc.) and Age (七歳, 九歳, etc.)

Table with 2 columns: Year (昭和55, 昭和59, etc.) and Age (一九歳, 二二歳, etc.)

3月同高校を卒業。4月駒澤大学文学部歴史学科入学。『割烹 味とめ』でアルバイトをし、後に調理師免許を取得するほど料理の腕を磨く。小説家としてからはその経験を生かし、料理の描写を度々登場させる。同大学卒業。編集プロダクション「ジービー」に入社。『狂乱廿四孝』で第六回鮎川哲也賞を受賞。作家デビューとなる。またこの年に、編集プロダクションを退社。『冥府神（アヌビス）の産声』『狐兎』刊行。『メビウス・レター』『花の下にて春死なむ』『闇色のソプラノ』刊行。『花の下にて春死なむ』にて、第五十二回日本推理作家協会賞、短編及び連作短編集賞を受賞。『メイン・ディッシュ』『屋上物語』刊行。『凶笑面 蓮丈那智ワールドファイルI』『バンドラ、Sボックス』『顔のない男』刊行。『親不孝通りデイクタイプ』『蜻蛉始末』『共犯マジック』『孔雀狂想曲』を刊行。この年に結婚するも、3年後に協議離婚となる。『蛭坂』刊行。『蝕身仏 蓮丈那智ワールドファイルII』刊行。7月より朝日カルチャーセンター新宿教室にて「ミステリーを書く」の講座を海渡英祐氏から引継ぎ講師を務める。好評を博すも一年で退任する。『緋友禅 旗師・冬狐堂』『桜宵』『支那そば館の謎』を刊行。『蛭坂』刊行。『瑠璃の契り』『写楽・考 蓮丈那智ワールドファイルIII』『暁の密使』刊行。父の病氣のため、川崎市から故郷、山口県に戻る。温泉が好きなおもあって、小学、中学時代を過ごした山口市湯田温泉に住む。『深淵のガランス』『ぶぶ漬け伝説の謎』『親不孝通りラブソディー』刊行。『香菜里屋を知っていますか』刊行。『なぜ絵版師に頼まなかったのか 明治異国助入（おたすけガイジン） 奔る（はしる）！』『虚栄の肖像』刊行。1月25日心不全のため死去。翌月、連載が終了し完成していた『うさぎ幻化行』が刊行。以後連載途中の未完結の『香菜里屋を知っていますか』の文庫に収録された未完の『双獣紀』が刊行される。翌年は、以前に雑誌『小学三年生』に連載されていた『ちあき電脳探偵社』も出版社が変わり刊行。『小説新潮』にて連載されて中絶となっていた未完成部分を浅野里沙子が補筆し、『邪馬台 蓮丈那智ワールドファイルIV』も刊行された。